

4 「今、やるべき事」は、目の前の課題（苦悩？）を曝け出し、共有すること！

堂本 彰夫

(1) 見えているのに、感じているのに、なかなかそこから動き出すことが出来ない現実？

問題点、課題は種々見えているのに、なかなかそれらを、みんなで力を合わせて解決していくことが出来ない！極端に言えば、そのことが、今、多くの人々が有している現実とも言えるのではないか！とりわけ、教育関係者には、そのことが言える（ただし、冷静に捉えれば、今ある、ありとあらゆる分野において、そのことが言えるとも言えるが？）！そんな中、気になる記事が目に留まった！それは、「『探究学習で子供の学力が低下？』教育現場でささやかれる説は本当か 日本の教育界で繰り広げられる“終わりなき”論争とは」（東洋経済オンライン：11/13）というものである！単純に言えば、「探究学習のせいで、子供の学力が下がっているのではないか」ということであるが、私が今、学校教育に最も期待しているそれ（探求学習／総合的な学習の時間）が、そのようになっている（学力が低下している）のであれば、真に由々しき事態である！果たして、その真偽はどうなのであろうか？

そこで、まずは、その記事には、「この“探究学習”という言葉は、実は正式には学校段階によって名称が異なります。2022年4月から高校で必修化され、『総合的な探究の時間』=『探究学習』の時間がどの高校でも取られるようになりました。小・中学校でも『アクティブラーニング』の手法が取られるようになり、総合的な学習はより一層の深化が進むことになりました。どちらも、詰め込み型の知識教育から一步進み、学んだ知識を実生活に活かしながら、他者との協働や主体的な課題解決力を育てる目的に導入されました。つまり『教科を超えた、学びの実践の場』として設計されている」とあり、続けて、「この論調が正しいかどうかについては判断が難しいところですが、実はこの『知識を詰め込む教育』vs『思考力を育てる教育』の議論自体は、ずっと昔から教育業界が扱ってきた議論。1990年代後半、『詰め込み教育からの脱却』を掲げて導入されたのが『ゆとり教育』。教科内容を削減し、体験活動や思考力を重視した教育が展開されました。」

「しかし、2000年代に入ると国際学力調査(PISA)での順位低下が話題となり、『ゆとり教育が子供の学力を下げた』という批判が噴出。結果として、再び学力重視へと舵を切る『学力回復路線』に転換していきます。つまり、『詰め込み型』→『思考力型』→『詰め込み型』という“教育の振り子”現象が発生した。文部科学省はこの二元論をどう整理しているのでしょうか。25年9月に公表された『次期学習指導要領に向けた基本的な考え方』では、この2つの教育を、構造的に示しています。この図の『知識及び技能』と『思考力、判断力、表現力等』は、この記事の中で勝手に自分が呼んでいる『詰め込み型の教育→知識及び技能』と、『思考力的な教育→思考力、判断力、表現力等』と置き換えてご確認ください。『ある程度の知識・技能なしに思考・判断・表現することは難しいし、思考・判断・表現を伴う学習活動なしに、知識の深い理解と技能の確かな定着は難しい』つまり、『知識・技能』と『思考・判断・表現』は対立する概念ではなく、相互補完的な“ヨコの関係”として位置づけられたのです。この両者を同時に育成することこそが、『主体的・対話的で深い学び』の実現につながるとされ、文部科学省は次期学習指導要領でこの在り方を強化しようとしています。今まで『詰め込み型』と『思考力型』が完全に分けられていたところから、今後はこれが混ざっていくということなのだ?!」と。

しかるに、残念ながら、冒頭の「学力低下」の証拠（指標）は、ここでは示されていないので（おそらく国際学力調査/PISAの結果？）、それ自体については、ここでは触れることは出来ないが、ここで示されている見解については、大いに賛同するものである！だが、繰り返し述べてきたように、こうした実践が、相変わらず学校の内部だけで行われたり、苦悩する（疲弊している）現場教職員に、多大な負担（責任）がかかってしまうようなことになったりすれば、結局は、相変わらずの「画の餅」に終わるかもしれない？！

(2) 現場教職員（の立場）からのコメント！曝け出すべき目の前の課題（苦悩？）！

そこで、今回は、上記記事に対する、現場教職員（の立場）からのコメントを、いくつか紹介することにする。まずは、

○元教員です。「探究学習」は言い換えれば、種もまかずに大きな収穫を期待するようなものです。何かについて探究するためには、興味・関心があり豊富な言葉や計算力、豊富な知識があつて初めて可能です。これら基本的な能力が不十分なまま、自分で課題を見つけ、自分で課題を解決など不可能に近いと思います。一部の付属校や厳しい受験をくぐりぬけてきた子供らを集めたクラスで成果があったという報告書を見かけますが、一般の公立校ではそれどころではありません。日本では、9年間の義務教育で基礎・基本を徹底的に学ぶことが理にかなっていると思います。

気持ちとしてはよく分かるが、そこには、「種をまく→収穫」、これを、すべて学校（教師）がやっていい（やらなければならない）という錯覚（傲慢？）がある？だが、実は、これが、これまでの学校（教師）の基本認識であった！やや批判的とはなるが、これが、現在の学校（教師）の過重負担（崩壊？）をもたらしたものであり、しかも、「種」は、実は、子ども達には、それまでに様々に播かれているのである（各種の学校段階で、あるいは生まれてからの家庭や地域社会で！さらには、各種のメディアを通して！）！そこに、学校教育用の種（プログラム）が加わっているだけなのである！そこが忘れ去られている？

○学習指導要領の変化は「詰め放題」に例えられます。土曜日授業があった頃はLサイズの袋にジャガイモ10個を詰めていました。ゆとり教育では袋をMサイズに縮小し、ジャガイモを7個に減らす一方でナス（総合学習）を追加しました。脱ゆとりでは再び詰め込みが進み、ニンジン（英語）も入れることに。現行では袋の大きさはMのまま、ジャガイモ10個、ナス、ニンジン2本に加え、ピーマン（プログラミング）やタマネギ（キャリア教育）まで要求されます。教師の努力で袋を伸ばして対応しましたが、時間外労働が増えたからと伸ばすことも禁止。でも「未履修は許さない」と迫られています。結果、袋はあふれんばかりで、まさにカリキュラム・オーバーロードの状態です。次期指導要領ではここにトマト（不登校対応）も詰め込み、どう詰め込むか（個別の指導計画）は各校で作れ、もし潰したら教師が責任取れ！もう学校はいつ張り裂けてもおかしくありません。

こちらは、何とも哀しい比喩であり、ある意味正当な現状認識であるが、これが、一方で、多くの現場教師の実感でもあろう！こんな状況の中での、次なる「指導要領」の改訂なのである！

(3) みんなが、それを知り、その有効策を見つけなければいけない！その突破口となるのが、各種の「コーディネーター」の出会いと協働にある?! 「教育協働アカデミー」の役割は、各種の「コーディネーター」をコーディネートすること?!

ところで、ここに、かつて呼ばれた「公民館の『三階建論（集い／学び／結ぶ）』」が頭を過る！これは、いみじくも社会教育の本質を指し示していたものであるが、特に、最後の「結ぶ」という機能（役割）が、ここにきて、大いなる可能性をもっているように思われる！要は、それを、学校教育まで広げて捉えていくということである！何故なら、学校も、その地域共同体に存在するものであり、その「三階建論（集い／学び／結ぶ）」の一環に位置づけられるものだからである（だが、実際は、その逆の方向で動いてきた→学校の自己完結性→閉鎖性！その原因ははっきりしているが、今まさに、その方向性が問いただされていることを直視する必要がある！）。

ただし、その三つの機能（役割）は、段階的に成就されるのではなく、言わば「混然一体」となって、同時に成就されるものである！強いて言えば、その要素を、論理整合的に構造化したものと言えるが、それはともかく、その「結ぶ」という機能（役割）は、現代においては、いわゆる各種の「コーディネーター」に委ねられているとも言える！それだけ、その機能（役割）が、様々な分野・場面で必要とされているということである！しかも、最早、そうしたことは、そうしたことの必要性を実感している人達が、様々なにやっている？例えば、過日垣間見させてもらったイベントもそうである！それは、「全国パーラー公民館サミット・イン・那覇」である（11/22～24）！「まちが丸ごと公民館になる?!」「集結！全国のパーラー公民館」というようなキャッチフレーズが掲げられていたが、そこに集まっていた人達は、まさに、私の言う「コーディネーター」達であった（役職名、あるいは自称？は、そのような表記ではないが？）！

これは、一見、いわゆる「社会教育」の分野での活躍というように見られているが（本人達も、そのように認識しているかもしれないが？）、内実はそうではない！ここでは、詳しくは書けないが、実態は、はるかにそれを超えている！しかも、一方では、こうしたコーディネーターの役割（機能）を有している人達は、他ならぬ学校教育の現場にも、多種多様に配属されている（CSや地域学校協働本部事業における「地域コーディネーター」や「キャリア教育コーディネーター」等々）！こうした人々は、言うなれば、その最前線での問題点・課題（限界も含めて？）を、ある意味嫌と言うほど見聞きしている?!だから、彼／彼女らの英知（苦悩も？）を結集（共有）すれば、その突破口も見えてくるはずである？

もちろん、立場や処遇面での問題もあり、彼／彼女らに、必要以上の負担や期待を強いることは、厳に慎まなければならないが、上記「パーラー公民館」の集まりに参加しているような人々と、彼／彼女らが、さらに大きなネットワーク、協働の枠組みを創り上げていくことが出来るなら、新たな可能性が見えてくるはずである！ということで、次回（12月22日）の「教育協働アカデミー」は、こうした、各種の「コーディネーター」に呼びかけ、それぞれの思いや現状を曝け出してもらい（若干上から目線ではあるが？）、互いの課題や苦悩を共有出来る場（きっかけ）となることを期待している！場所や時間帯が、多くの人に都合がよいものとなることを願ってはいるが、やはり実際は、かなり限られた人達しか参加できないであろう（たとえ、オンライン参加であろうとも！）?!しかし、やはり、やらなければいけない！(つづく)